

新たなるいで立ちにあたりて

委員長 加賀 栄 治

いささか装いを新たにしたこの雑誌ぶみのとびらで、今さらことごとく言挙げするつもりはない。言挙げは、ことごとしいほど虚ろに響くであろう。

だが、われらの学会とわれらの雑誌の新たなるいで立ちを、あえてここに宣言するのは、共にどうわれらの心をひきしめ、世の人々の理解と支援を仰ぎたいからである。

かつて、われらのつどいは、東京文理科大学から東京教育大学へと続いて、その大学の名を冠してきたが、今やそれが消えたかたちとなった。これによって、大学の名を冠することに伴う若干の閉鎖性と、恩師・先輩とのえにしに伴う若干の甘えとから、脱却できたなどとうぬぼれるものでは、けっしてない。

むしろ、重くのしかかってくる大小さまざまな困難を思えば、遙かなる道程へと踏み出す足ども、ともすればしどろになるのを覚える。

けれども、今やいで立ったわれらの道程では、斯の学の永遠なるかぎり、おのがじしその領域において足下を踏みしめ、学問研究と教育実践にあらんかぎりの力をふりしぼり、時々のみのを引っさげて切磋琢磨するしかないのだ。われらは、この出陣の武者振るいに似た厳しい心の張りを、どこまでも持ち続けようではないか。

天の時はその帰趨なお定かならず、地の利は今のわれらに傾かぬとしても、人の和こそわれらの最も頼りうるものであるかぎり、道程のあなたの光明を、われらは必ず手にしうるであらう。

世の人々よ、われらのいで立ちを見守りたまえ。

斯の学における公正なる批判を甘受しつつ進まんとするわれらに対し、願わくは、心からなる激励と支援を賜わらんとを。

(一九八〇・三・三一)